HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	旧ソ連・中央アジアのスーフィズムと病気治療 : アフマド・ヤサヴィーの現代的意義に寄せて
Author(s)	和崎, 聖日
Citation	日本中央アジア学会報, 14, 45-46
Issue Date	2018-07-31
DOI	10.14943/jacas.14.45
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88345
Type	article
File Information	JB014_011wazaki.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

旧ソ連・中央アジアのスーフィズムと病気治療
―― アフマド・ヤサヴィーの現代的意義に寄せて ――

和崎　聖日

本報告では、旧ソ連・中央アジアを対象に、病気治療を目的とした「ジャフル（jahr）」と呼ばれるスーフィズムの儀礼を取り上げた[1]。この儀礼は「声高のズィクル（jahri zikr/ zikri jahr）」の一種と考えられる。そこでは、独特の調息法とともに、12世紀の高名なスーフィー、アフマド・ヤサヴィー（?–1166/67）[2]によるテュルク語詩などが治療者によって謳われる。ここでの「治療者」とは、アフマド・ヤサヴィーを師（pir）と仰ぎ、また対象となる地域社会で世襲によって「スーフィー」となる男性を指す。すなわち、本報告で取り上げた事例の場合、アフマド・ヤサヴィーの伝統は、タリーカとしてではなく、「民間信仰」的なスーフィズムとして存在している点に特徴があった。本報告では、ソ連時代の反スーフィズム政策を概観したうえで、映像記録も交えながら、ジャフルの儀礼が当時いかに実践され続けたのか、またそれが今日において実際にどのように行われているのかについて詳しく紹介することを目的とした。この目的の解明をとおして、中世のスーフィー、アフマド・ヤサヴィーの存在がソ連解体後の中央アジアにおいてどのような位置を占めているのかについても本報告では考察を試みた。

本報告では、結論として以下の２点を明らかにした。第１に、治療者であるスーフィーたちと病人として彼らのもとを訪れた高齢男性へのインタビューから、ソヴィエト近代化のプロパガンダの影で近代医療の恩恵を十分に受けることができなかった中央アジアの山岳地帯など僻地の一部においては、タジク人のスーフィーたちがジャフルの儀礼をとおしてジンを操り、人びとを治癒し続けてきたことを明らかにした。また、そこでのスーフィーが現地の

---

(1) 本報告が取り上げたフィールド資料は、2016年8月と2017年8月に中央アジアの現地研究者と共同で実施した調査に基づいている。

(2) アフマド・ヤサヴィーは、周知のとおり、現代のカザフスタン共和国南部に位置するサイラム市出身のスーフィーである。彼は、当時の民衆に愛された単純な韻文形式の詩を用いて、従来アラビア語とペルシャ語で表現されてきたスーフィズムの思想を、中央アジアのテュルク系諸民族の言語であるテュルク語でわかりやすく表現した。そのことによって、彼は中央アジアの特にテュルク系遊牧民のイスラーム化に尽力したことで知られる［堀川 1995: 267-304］。

ムスリム住民から「名医」として頼られ続けてきたことも指摘した。だからこそ、ジャフルの儀礼はソ連時代の反スーフィズム政策の中でも密かに実践され続けたと考えられた。第２に、実際のジャフルの儀礼では、４代正統カリフやハナフィー学派の名祖アブー･ハニーファ（699?-767）、中世のナクシュバンディー教団の高名な指導者マフドゥーミ･アーザム（1461/2-1542/3）[3] らへ向けたドゥアーがなされた後、神への愛を謳うアフマド・ヤサヴィーのテュルク語詩や預言者ムハンマドを讃美する作者不明のタジク語詩などが朗詠され、また独特の調息法とともにアッラーの99の美名（の一部）が連祷されることを示した。そこではまた、スーフィーがジンを追い払う目的で病人を鞭打つ姿も認められた。このことのシャリーアにおける合法性について、その根拠が預言者ムハンマドとアフマド・ヤサヴィーによる病人への鞭打ちに関する伝承にあるとするスーフィーの語りも紹介した。この点について補足すれば、ジャフルの儀礼の核となる知識と行為の源泉がとりわけアフマド・ヤサヴィーにあると強調されることも明らかにした。以上のことから、中央アジアの山岳地帯など僻地の一部ではソ連解体後の今日に至るまで中世の高名なスーフィー、アフマド・ヤサヴィーに起源をもつとされる伝統（ジャフルの儀礼）が「病気治療の文化」として絶大な信頼を寄せられ、また実践され続けていることが、彼の存在の現代的意義であると考えられた。本報告では、ジャフルの儀礼がソ連時代の対スーフィズム政策の中で置かれた位置づけについて、公文書などに依拠しながら正確に論じることができなかった。これを今後の課題としたい。

参考文献

堀川徹 1995「中央アジアの遊牧民とスーフィー教団」堀川徹編『世界に広がるイスラーム：講座イスラーム世界３』東京：栄光教育文化研究所、267-304頁。

（中部大学全学共通教育学部）

[3] 調査の対象となったスーフィーたちによれば、アフマド・ヤサヴィーを師と仰ぐスーフィーがマフドゥーミ・アーザムなどナクシュバンディー教団の高名な師たちへの敬意の表明をドゥアーにおいて欠かさない理由は、両者の思想潮流の起源が共通の師であるユースフ・ハマダーニー（?-1140）に遡るからである。